令和４年度　学校経営計画に対する最終評価

石川県立飯田高等学校

重点目標		具体的取組		実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
1	確かな学力の醸成のために、主体的・対話的な深い学びにより、知識・技能、思考力・判断力・表現力、学びに向かう力を育成する。	①	習熟度別の学習指導を推進し、個に応じた学力の伸長を図る。	模擬試験の英数国総合偏差値で60以上10%、55以上20%、50以上50%の3つの項目のうち Ａ： 全て達成 Ｂ： ２つ達成 Ｃ： １つ達成 Ｄ： 達成なし	１年 D 60以上 9.6% 55以上 19.2% 50以上 41.1% ２年 D 60以上 9.8% 55以上 16.4% 50以上 34.4%	成　果：1月進研模試において、1年生は偏差値70以上の最上位層2名を維持したまま、11月模試と比較して3つの項目すべてにおいて割合が増加し、年間を通して着実に学力を伸ばした。2年生は偏差値60以上の上位層で伸びが見られた。 課　題：2年生の中位層の学力向上 改善策：教科と学年の情報交換・意見交換を通して、各教科の全体への指導と上位者指導の取組内容の見直しを行う。
		②	予習・授業・復習のサイクルを確立し、自律的学習習慣を定着させる。	進路アンケートで授業外での学習時間が学年＋1時間の生徒の割合が Ａ： 70%以上 Ｂ： 60%以上 Ｃ： 50%以上 Ｄ： 50%未満	D 1年 10.4%（9～12月） 20.8%（冬休み） 2年 1.1%（9～12月） 16.1%（冬休み）	成　果：長期休業期間では、1・2年生ともに夏休みと比較すると冬休みで目標達成の割合が増加した。特に1年生は夏休みの段階で過年度の2倍近い割合が目標を達成しており、冬休みでも同じ割合を維持できている。 課　題：2年生の学習習慣の確立が不充分である。 改善策：学年と教科の連携の下、学力層別に取り組むべき課題を生徒に明確にするとともに、具体的進路目標を定める中で、生徒の学習意欲を高めることで学習習慣の確立を目指す。
		③	公務員試験に対応できる幅広い知識と情報処理能力を育成する。	公務員模擬でのBランク以上の生徒の割合が Ａ： 60%以上 Ｂ： 40%以上 Ｃ： 30%以上 Ｄ： 30%未満	B 44.4%	成　果：3年生対象公務員模擬試験最終回で、受験者9名中B判定4名、C判定4名、D判定1名の計9名で44.4%であった。 課　題：1次試験（教養・適性）優先、また業務内容の理解が十分でなく、2次の面接への対応が不十分である。 改善策：各職種での業務内容の指導を徹底し、面接での適切な応答が自然にできるよう日頃から自分で考える習慣を持てるような指導を加える。
		④	多角的に考察できる学習課題を精査し取り組ませることで思考力を育成する。	授業改善アンケート項目⑥「この授業で学力がつく」⑩「友人と意見を共有することにより理解を深めることができる」の評価が Ａ： 90%以上 Ｂ： 80%以上 Ｃ： 70%以上 Ｄ： 70%未満	A ⑥95.3% ⑩94.7%	成　果：⑥⑩合わせての評価が90%を超えている。 課　題：タブレットなどICT機器の活用について全体に広がっていない。 改善策：ICT機器を活用した授業の研修会を継続して設定する。

学校関係者評価委員会の評価	・部活で忙しい生徒についても、部活終了後に教室で少し残って勉強したりなど、隙間時間を利用するような雰囲気づくりを勧めて頂きたい。
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善指導	・学習時間について、遠方から来ている生徒もいて、学習時間の確保が難しい背景もある。バスなどの移動時間も効果的に利用するよう、声掛けをしていく。

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
2 生徒の人間関係力を育成することにより、円滑な社会生活を送る資質を養い、人間力を育む。	① HR活動や委員会活動を通して、集団における人間関係力を育む。	意見交換を行い、協働した取り組みが日常的に出来たと考える生徒の割合が Ａ： 80％以上 Ｂ： 70％以上 Ｃ： 60％以上 Ｄ： 60％未満	A 全体93.6% 1年90.6% 2年96.4% 3年94.7%	成　果：学校行事を中心に協働した取り組みが十分に実践できた。 課　題：コロナ禍の下、さまざまな制約がまだ残り実施できない活動も多くある。 改善策：withコロナになり、さらに工夫した活動ができるよう学校全体で取り組む。
	② 携帯電話・スマートフォンの使用ルール遵守と使用時間の削減に取り組ませる。	生徒1人あたりの携帯・スマートフォンの学習以外の1日平均使用時間が Ａ： 30分以内 Ｂ： 40分以内 Ｃ： 50分以内 Ｄ： 50分より長い	D 全体74.3分 1年72.1分 2年82.2分 3年69.6分	成　果：使用に関するルールやマナーはほとんどの生徒が守っている。 課　題：使用時間の平均は106.6分。そのうち学習に関する使用時間は30分である。 2年生の使用(110分)が最も多く、かつ学習使用の時間(28分)が最短である。 改善策：2年生を中心に学習時間の確保を最優先させる。学年との連携を強める。
	③ 時間厳守の習慣の確立を目指し、「遅刻0運動」を継続する。	「遅刻0」の日数が授業日数に対して Ａ： 85％以上 Ｂ： 75％以上 Ｃ： 65％以上 Ｄ： 65％未満	D 全体51.8% 遅刻なし99日 （授業191日）	成　果：ほとんどの生徒は時間厳守の生活ができている。 課　題：後期に遅刻をする生徒が出てきた。 改善策：担任、教育相談との連携や連絡を密にし、本人の自覚が高まる指導を継続して行う。
	④ 挨拶、身だしなみ、交通ルール遵守など、基本的な生活習慣を定着させる。	日常的に挨拶ができ、規則を守ることが出来た生徒の割合が Ａ： 85％以上 Ｂ： 70％以上 Ｃ： 60％以上 Ｄ： 60％未満	A 全体96.8% 1年96.2% 2年97.6% 3年96.8%	成　果：大部分の生徒はおおむね基本的な生活習慣を身に付けている。 課　題：一部の生徒に頭髪や服装で指導が必要な生徒が出てきた。 改善策：担任と連携し、挨拶の大切さやメリットを根気強く指導する。

学校関係者評価委員会の評価	・SNSをうまく活用できていないから、総合的な学習の時間（ゆめかなプロジェクト）等で外部発信がうまくいかない部分もあるのではないか。高校生は多感な時期で、様々なことに触れ合って成長していくべきなので、スマートフォンなどの使用に関してはこれ以上制限する必要はないと思う。
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善指導	・SNSやタブレットについて、使用を全否定するわけではないが、使用中のルール等を確認・徹底させていく。

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
3 地元中学校や地域社会と連携した取組により、学力はもとより、様々な発想力や実践力を高める。	① 他者や地域と協働した探究学習を行うことで、学びに対する前向きな心を育む。	「ゆめかな」に対する生徒の満足度が A： 80%以上 B： 70%以上 C： 60%以上 D： 60%未満	D 51%	成果：授業時数が少ないことやコロナ禍など制約が多い中で、約半数の生徒が「自らが学びの主導権を握り、自律的な学びを進めることができている。」と回答している。 課題：約半数の生徒が自律的に学びを進めることができていない。 改善策：教員に課せられる役割は容易ではないが、生徒を主体的な学びに導く指導を試行錯誤しながら実践していく。
	② 各教科の授業や探究学習において地元小・中学校との接続・連携を推進する。	地元小・中学校と連携した授業回数が A： 20回以上 B： 15回以上 C： 10回以上 D： 10回未満	D ２回	成果：1月時点で、2回の実績に留まっており十分な成果をあげられなかった。 課題：昨年度同様、感染症の流行や時間的な余裕のなさに起因し、校種を超えた協働学習の機会を設定することが難しかった。 改善策：定期的に中学校との連絡を行い、探究学習における連携の方法を検討していく。
	③ 地元産業に貢献する人材育成のため企業見学会や講演会を実施する。	地元への興味・関心や貢献意欲が高まった生徒が A： 80%以上 B： 70%以上 C： 60%以上 D： 60%未満	D 48%	成果：11月1・2年ビジネスコース対象に「ふるさと企業を知る会」を実施した。地元就職希望21%だったものが、実施後「地元就職も選択肢」と考えるようになったものを含めて48%に増加した。 課題：地元志向が現3年生と比較して極端に低い。 改善策：今後も地道に地元企業の魅力を知る企画等を継続していく。
	④ 産学官地域連携人材育成事業や地域学等において、地域と連携して地域愛を育む。	地元理解や地元への貢献意欲が高まった生徒が A： 80%以上 B： 70%以上 C： 60%以上 D： 60%未満	A 全体92.5% 1年 94.3% 2年 90.0% 3年 92.6%	成　果：高い割合で生徒は地元への貢献意欲が高まった。 課　題：コロナ禍のため、外部へ出る機会が少なかった。 改善策：校外での活動を中心に実施方向を再検討しながら実践活動を取り入れていく。
	⑤ ボランティア活動や小・中学校との活動を通して地域に貢献できる人材を育成する。	地域に関わろうとする意欲がが高まった生徒が A： 80%以上 B： 70%以上 C： 60%以上 D： 60%未満	A 全体 94.1% 吹奏楽部 90.1% JRC部 100.0% 体験ボラ 100.0%	成　果：大多数の生徒は地域と関わろうとする意欲が高まった。 課　題：コロナ禍のため、ボランティア活動の実施数が減った。 改善策：出来る事を再検討し、様々な活動を通して意欲が高まるよう改善策を具体化する。

学校関係者評価委員会の評価	・高校生のアルバイトの禁止に関しては、若手がいない珠洲市においては経験の意味も込めて許可してあげた方がいいのではないか。
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善指導	・学校生活との兼ね合いや時間の関係上、生徒のアルバイトを許可するのは厳しい。

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
4 教職員自らが効率的な業務や指導法の改善により、ワークライフバランスを実現する。	① 若手教員早期プログラムの推進と併せ、研究授業や互見授業により授業改善を図る。	指導力が向上したと感じた教員が A： 80%以上 B： 70%以上 C： 60%以上 D： 60%未満	A 100%	成果：「若手育成プログラム」の運用について、1年間通して計画通り進めることが出来た。テーマも多岐にわたり受講した教員に興味・関心を持ってもらうことができた。また、中間評価の段階では互見授業の回数が少なかったが、強化週間を2回設置して指導力向上に努めた。 課題：若手のみならず、多くの教員に出席をお願いしても出席者数が増えない。 改善策：デジタル分野など興味を持ってもらえるようなテーマや時間設定など工夫を行いたい。
	② 授業改善アンケートの結果をもとに授業改善を図り，分かりやすい授業を展開する。	授業は分かりやすいと感じた生徒が A： 80%以上 B： 70%以上 C： 60%以上 D： 60%未満	A 92.1%	成　果：授業改善アンケートで、A「あてはまる」B「だいたいあてはまる」の肯定的評価の合算が、90パーセントを超えている。 課　題：A以外と答えた生徒も一定数おり、さらなる向上を目指したい。 改善策：ICT機器も活用した、授業の研修会を工夫を加えながら継続して設定する。
	③ 研修などを通してカウンセリングマインドを涵養し、多様な生徒への指導力を高める。	研修会で得た知識などを実践している教員が A： 80%以上 B： 70%以上 C： 60%以上 D： 60%未満	A 100%	成　果：研修会で得た知識などを実践してみたいと「思う」「まあまあ思う」と答えた回答が100パーセントであった。 課　題：開催の時期について検討し、さらに充実した研修会を目指したい。 改善策：アンケートをもとに今後の研修会についてテーマを検討する。
	④ 夏季における柔軟な勤務時間制度を活用することで、生産性が高く効率的な業務遂行を推進する。	夏季における柔軟な勤務時間制度の活用が前年比 A： 15%以上 B： 10%以上 C： 5%以上 D： 5%未満	評価できず	夏季における柔軟な勤務時間制度が実施されなかった。
	⑤ ゴミ削減を推進するなど職場の環境美化を推進することで業務の効率化を図る。	資源ゴミのリサイクルや職場環境の美化に努めていると感じた教員が A： 75%以上 B： 65%以上 C： 55%以上 D： 55%未満	A 84% （35%＋49%） （努めている，まあまあ務めている）	成　果：ごみの少量化・身の周りの整理整頓・印刷の再生紙使用・環境美化の意識向上について呼びかけ、意識調査を行った。1学期に比べて、意識が高まったと回答が多かった。（当てはまる35%、まあまあ当てはまる49%、あまり当てはまらない13%、当てはまらない3%） 課　題：全教員の意識が共通し行動できているとはいえない。 改善策：より多くの教員が環境美化への意識を高められるように声かけや働きかけを根気強く行う。

学校関係者評価委員会の評価	・土日も先生方が来て指導していると聞くが、教員の負担は大丈夫なのか。働き方改革に関するアンケートの結果はA評価だが、特に３年生の先生方は十分に休暇を取れているのか。
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善指導	・働き方改革の観点については、生徒の学力や職員の状態を考慮し、慎重に考えて取り組んでいく。

重点目標		具体的取組		実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
5	GIGAスクール構想実現に向けて、個人の授業力向上とともに学校教育力を高める。	①	GIGA校内研修年間計画に基づいて研修を進める。	授業で5回以上1人1台端末を用いた教員が Ａ： 80%以上 Ｂ： 60%以上 Ｃ： 40%以上 Ｄ： 40%未満	B 74%	成　果：タブレット等のICT機器を積極的に使用し、他の教員と情報共有し利活用を推進する教員が増えた。 課　題：消極的で活用できない職員も若干いる。 改善策：ICT機器も活用した授業の研修会を設定し、全校のレベルを更にアップしていく。
		②	生徒の主体的な学習姿勢を涵養するため、タブレットを用いた授業を推進している。	1人1台端末を活用した授業で、学習に対する興味や意欲が高まった生徒が Ａ： 80%以上 Ｂ： 70%以上 Ｃ： 60%以上 Ｄ： 60%未満	A 93%	成　果：利用が促進されなくてはならないツールとなっている。様々な場面で工夫して使用している。 課　題：すぐ検索しインターネット上のデータに頼ってしまい、考えないで答えを求めてしまう傾向がある。 改善策：情報モラルも意識させながらも、思考につながるような問いかけや課題設定を工夫する。
		③	ICT機器の活用によりペーパーレス化を図るなどして、業務の効率化を図る。	ICT機器の活用により業務の平準化･効率化が進んだと感じる教員が Ａ： 90%以上 Ｂ： 80%以上 Ｃ： 70%以上 Ｄ： 70%未満	B 83%	成　果：情報周知や資料の共有が進んで効率は上がっている。 課　題：従来のやり方で業務を終わらせてしまう職員も若干名いる。 改善策：個別情報を提供し、効率化につながる実感を持てるようなサポート体制を確立する。

学校関係者評価委員会の評価	・保護者視点で見ると、飯田高校の先生は本当に指導熱心だと感じる。学習意欲を引き出す雰囲気は非常に評価できるので、継続して進めて頂きたい。
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善指導	・地域間格差を是正するチャンスとして、今後はＩＣＴを効果的に活用していきたい。